

病原性大腸菌

O1157とわが家



武田 京子

今年の夏、岡山県邑久町や大阪府堺市で発生した病原性大腸菌O1157による食中毒は、子どもを持つ母親として無関心ではいられないものでした。

学校給食がその感染源であることが判明するにつれ、学校の給食はどうなのか、学童保育の手作りおやつや麦茶はどうなのか、というような心配は心を

かすめました。今にしてみれば「対岸の火事」への心配に過ぎなかったように思います。

「まさか、九月も末の肌寒くなった時期に……」

「盛岡市にいくつもある小学校の中でどうして緑が丘小学校が……」

「よりによって家の子が最初の感染者の十五人にな

るなんて……」

かかりつけの小児科の先生（学校医でもある）からの「お宅のお子さんの便からO-157が検出されました。後ほどお電話下さい」という留守番電話に残されたメッセージを聞いたときの率直な感想でした。

その一週間ほど前、先輩にあたる東京の幼稚園の先生を附属幼稚園にご案内したときにO-157は話題に上っていました。保育活動に様々な影響が出ていること、例えば園児たちが楽しみに育てたミニトマトやスイカを子ども達に食べさせることが出来なかったとかお弁当の前のテーブルの準備のための消毒薬に気を使うことなど、をお聞きして、「何かことが起こってからの対応よりもやはり予防策が大切ですね」と話し合ったばかりでした。盛岡市のO-157集団感染については、十一月六日原因究明専門家検討会議によって最終報告が出され、学校給食は三学期を目標に施設・設備の改善が行われ

ており、一応最終段階を迎えたと考えられます。そこでわが家のO-157騒動の顛末についてご報告したいと思います。

九月二十五日夕方、いつものように学童保育に子ども達（S小五・T小二）を迎えに行った帰り道、Sが腹痛を訴えました。消化の良いあっさりした食事にして様子を見ていると便通があり、「普通だったよ」という報告でしたが、念のため消化薬を飲みせ早めに寝かせました。

けれども翌朝、「おなかが痛い」となかなか起きできませんでした。数年前、精神的な理由からの腹痛を起したことがあるので、そちらの理由も考えましたが、父親に様子を見てもらうと、「おなかが痛くて歩けないけど、学校へは行く」と申しますので少し安心し、学校へは送っていくことにしました。学校で保健室の先生とお会いし、お話しするうち、同じような症状の子どもが昨日も数名いて保健室は忙しかったことがわかってきました。

その日の午後、Sから電話があり、クラブ活動を休んで帰宅したとと下痢をしたことの報告があり、診察を受けました。

「もしかして、僕、O-157なの？」と聞くSに、「一回だけの下痢でしょう？ O-157だったら、ずうっとトイレから出てこられないくらいひどいって……」。

新聞に連載されていた関連記事の記憶をたどりながら話していた時もまだ、わが家にとってO-157は「対岸の火事」だったので。「念のため、便の検査をしておきましょう」と別室で検査を受け、「冷たいもの食べちゃダメよ」と薬剤師さんに言われて帰宅しましたが、顔色も良く通常通りの長男でした。

翌二十七日、Sは「時々、少し痛むけど大丈夫だよ」と登校していきました。職場の同僚の先生から「どうやら食中毒らしいから（小学校で）緊急役員会が開かれるそうよ」という話です。昼には長男の

担任から縁が丘小学校でO-157が発生したと電話連絡があったこと、給食はパンと牛乳だけで午後の授業はないことなどの連絡が父親からありました。夕方、学童に迎えに行きますと「O-157なんだって。夕方のテレビのニュースに出るから見なぐちゃ」などと二人ともはしゃいでおりましたが、帰宅後、留守番電話のメッセージを聞いたとたん、長男は表情を失い無口になってしまいました。

私たちも、何をどうしたら良いのか、わからなくなってしまいました。それぞれの学年の緊急連絡網で明日の説明会には必ず出席するように、と連絡があり、さらに、保健所からも「消毒の方法の説明や色々お話しを伺いたいけれどお宅の場所がわからない」という電話が入ってきます。この日は中秋の名月でしたが、お団子を作る約束や週末に父親と子ども達が秋田の祖父母の所へいく予定は取りやめになりました。

この一か月間の行動の調査、消毒の方法、家族全

員の検便の説明をして保健婦さんが帰ったのは、八時過ぎており、とりあえず担任の先生に連絡を取りました。「O-157は指定伝染病です」という保健婦さんの説明から、「学校はおやすみさせた方が良いのでしょうか」というわたしの質問に対して、

「お医者さんの指示に従って下さい。何があってもこのことが原因でS君が嫌な思いや悲しい思いをしないように教職員全員でバックアップしますのでご安心下さい」と仰って下さいました。そのときには混乱状態のためピンと来なかったのですが、後に帯広市において小学校教員の対応が問題になったことを考えると、感染者の気持ちに沿った先生の対応は

とてもありがたかったと思います。さらに追いかけるように、「明日の学校での説明会では生徒全員に検査容器を渡しますので、そのときにはS君の分を必ず受け取って下さい（後で返して下さいればよいですから）」という指示まで戴きました。

二十八日、朝刊にはO-157のニュースはもちらん載っていました。原因として、①学校給食②学童保育③地域のお祭りが考えられる、とあり、なぜことさら学童保育が取りざたされるのだろう、まるで家の子が原因と指摘されているような、イヤな感じがしました（学童からは入院者六名のうち二名がいたためと考えられます）。

説明会には殆ど家庭から保護者が集まり、校長先生・保健所長・教育委員会関係者からの説明を聞いた後も熱心な質疑応答が行われました。きょうだいが通っている保育園から、当分の間登園を差し控えて欲しい、といわれたが、教育委員会からその必要はないことをちゃんと行って欲しいという要望に



対するあいまいな教育委員会側の答えに、校長先生が筋道を立てた助言をする場面があり、保護者達全員は校長先生に対する信頼感を高める結果になりました。学童保育の説明会でも同様の説明がありました。共通していたことは、原因の究明はとてども大切だから何を置いても急いでするが、誰がもとで（病原菌が）広まったというような考え方はしないで欲しいと言うことでした。0-157に関しては、感染した人もしない人も誰もが被害者、たまたま、疲れがたまっていて抵抗力が落ちていたために発病したのだから、このことを原因にして「いじめ」等が起きないようにということが中心でした。

感染者を特定しない配慮は行き過ぎと言うほど徹底し、何気なく「まだ休んでいる人いるの？」等と聞くと、「そういうことは言っではいけないことになってるんじゃないの」と逆に子どもの方から注意されてしまいました。学校や学童保育という集団の中でのリーダーのあるべき姿を知らされたような

気がします。

これに比べてわが家の長男に対する対応はひどいものだったと思います。「よりによって、こんな時に間の悪い、行き足をかけるようなことばかりする」と自分たちの都合を優先して、言っではいけない言葉を投げつけてしまったのです。Sはますます言葉少なくなり、スーッと自分の部屋に引き上げてしまったのです。いつもとはちがう長男の様子に、はっと我に返り、善後策を考えました。私は、土・日、全面的に子どもの世話を引き受けられない予定があり、夫婦で時間を割り振りして、学校と医者と保健婦さんへの対応にあたりました。

父親は、小児科の受診後、大阪大学や岡山大学のホームページから0-157に関する情報を集めてきました。消毒や予防についてはもう既に保健所や



学校から配布されていたので、メンタルケアについての情報が役に立ちました。病気のメカニズムを正しく理解すること、感染した子どもには責任はないことを知らせること、過敏な不安定な状況にあるので内省的に処理できず問題を抱え込んだりしがちであることが書かれていました。

「ちゃんとお医者さんにかかって、きちんと手や下着の消毒もしているから誰にも移すことはないから大丈夫。おまけに、Sは学校をお休みしてもいいんだから、自分から言わない限り誰にも気づかれないうもの」と励まし、おしゃべりなTにはしっかりと口止めをしました。これがSへのメンタルケアになったかどうかは良くわかりませんが、夜には担任の先生からも電話を戴き気持ちに落ちつきを取り戻したようです。

後日、Sに「O-157にかかったと知ったときどういう風を感じたの？」と尋ねると、「僕ね、死ぬんだとおもった」という答えでした。堺や邑久の

ニュースから、「O-157はこわい病気で、かかったら死ぬ」と思ってしまったのでしょうか。……ではないでしょうか」という憶測を情報源に、「原因は学童保育か地域のお祭り」等とかかれてしまうと、学童保育の存続や子供会活動への影響が危ぶまれます。報道の責任についても考えさせられました。

わが家では消毒薬は台所の隅にあり、O-157は過去のことになりつつありますが、給食の再開まで毎日のお弁当の献立に悩まされそうです。生活科で収穫したさつまいもも本来ならばふかし芋にしてみんなで会食したのですが、少しずつ持ち帰って家庭で調理して味わうことになりました。

(岩手大学)